カトリック仙台教区報

2012年7月1日　No.206
発　行
カトリック仙台司教区
〒980-0014
仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任　広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

仙台教区「新しい創造」青森県の集い

《主においてわたしたちは一つ》を確認

6月10日（日）八戸聖ウルスラ学院を会場に行われた「青森県の集い」には、青森県の各教会から信徒・修道者・司祭が一堂に会した。さらに、岩手県、宮城県、福島県からの参加者も含め470余人が集結した。会場には、「絆のローソクリレー」のメッセージと写真が県別に分けて掲示された。青森県内全教会のスタンプが並べられ、休憩中に、「スタンプラリー帳」に押印する姿も見られた。充実した大会に、「常に新しい創造」への取り組みのさらなる力を得て、来月の岩手県大会での再会を楽しみに散会した。

大会は、開会式に続いて「復興を目指して」と題した映像が流れ、震災の犠牲者と復興を願って各自心の中で祈りをささげた。続いて平賀徹夫司教のメッセージと、「津波を超えて・闇から光へ」と題した山浦玄嗣氏の講演。午後は、平賀司教主司式のミサ。閉会行事では、岩手県連協会長菅野耕毅氏から岩手県大会への招きのことばがあり、大会宣言が参加者を代表して大会副実行委員長佐々木誠氏によって読み上げられた。

ミサの中で奉納された「絆のローソクリレー」が、久慈教会の教会委員長に引き継がれ、「希望の灯（あかり）」を高らかに歌って閉会となった。

青森県の集いへのメッセージ

仙台司教区 司教 平賀徹夫

青森、岩手、宮城、福島の4県に住む私たちが、仙台教区という一つの教会を構成しているのですが、私たちは、昨年の7月から今年の7月までを「仙台教区年」と銘打ってすごしているところです。昨年の7月には宮城県で、9月には福島県で、「県の大会（集い）」が開催されました。本日の「青森県の集い」においても私たちは、声を合わせて神への賛美を共に歌い、共に講演を聞いて熱い思いをさらに熱くし、心を一つにして感謝の祭儀を献げて、信仰の恵みを、感謝し、喜び、これからもますます、共に、神の子として成長していく恵みと導きを祈り求めたい、そして本日も、感謝と喜びのうちに、「主において　わたしたちは一つ！」を実感したいと思います。

昨年3月11日、「東日本大震災」というあの大変な災害に見舞われてしまい、教区大会開催を危ぶむ声も起こったほどでした。しかし私は、このような大災難に見舞われた今であるからこそ、この社会の中にあって、私たちが神の子らである『しるし』として自らを現すものとなりたいと願い、当初からの「1年間を教区年とする教区大会」という計画を、中止せずに開催しよう、と呼びかけました。教区年のテーマは少し変えて、「常に新しい創造へ」としました。こうして教区大会・各県の集いが開かれることになったわけですが、その開催のため、労を惜しまずご協力くださった各県のすべての方々に、厚く御礼を申し上げます。この「常に新しい創造へ」というテーマは、「皆で力を合わせ、この大災害に打ち勝って新しいものを創造して行こう」というのがもともとのねらいだったのではありません。聖パウロの「コリントの信徒への手紙Ⅱ」の一節に、「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」とあります（5章17節）。

生命の泉

▼グローバル化の時代になって世界に目を向けた行動が求められる。福島原発がメルトダウンしていたことが判明した。当初には報道されていなかった深刻な事態だ。それが15か月経ったら再稼働されることになった。停止してしまえば日本経済が持たないと言う▼放射能汚染は、40日かけて世界を一周する。どこかで発生する事故は世界中に放射能をまき散らす。使用済みの高レベル放射性廃棄物はガラス固化体として地下深く埋設するというが、放射線が半減するには数万年に及ぶものもある▼我が国が止めても、世界は豊かさを求めて原発は増えてゆく。発生当時、全廃の世論が多かった時でも原発建設技術を輸出する▼すべてに経済を優先する発想は何とかならないか。私たちには未来の地球に責任はないのか▼シリア内戦がどれほど激しくなっても、両陣営に武器を輸出する先進諸国はますます儲かる。「眼を覚ましていよ」というみことばは「荒野に叫ぶ声」か▼6月10日、白昼大阪ミナミの繁華街で起きた通り魔事件は凄惨だったが、秋葉原殺傷事件以降、通り魔事件はすべて殺傷事件だ▼豊かになるにつれ他人のことに無関心になり、取り残された者の怒りと空しさは凶悪な事件として噴出する▼「身分の低い人々と交わりなさい」（ロマ12・16）は、平和の原点であることに気付く。「神と富とに仕えることは出来ない」。戦争も巷の殺傷事件も同根の出来事だ。

（守）

私たちキリスト信者は信仰により、洗礼によってキリストと結ばれた者ですから、すでに「新しく創造された者」としていただいている存在です。大地震・大津波・原発事故という大変な災難の中にある私たちですが、信仰による私たちの現実、私たちはどのようなものであるのか、をはっきり意識し、今すでにキリストと結ばれた者としていただいたことを喜びながら、一日一日、なお一層、固くキリストと結ばれ、キリストの心を心として生きる者となっていきたいのです。それが「**常に新しい創造へ**（英語のロゴ・Toward an even better creation）」ということです。友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない（ヨハネ15・13）」と教えられている「愛」にはまだまだ及ばないかもしれないけれども、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい（ローマ12・15）」という、キリストの弟子たちへの聖パウロの勧めを私たちも生きるために、この大災害に見舞われ苦しんでいる人々と共に泣き、共に喜びを見いだす者となっていきたい。それが「寄り添う」ということが目指すところです。そのように努めることを通して、「大災害に打ち勝って新しい何かを創造して行く」ということにつなげていけたらよいと思います。

ところで、今年の10月11日は、第二バチカン公会議開幕の日からちょうど50年、そして『カトリック教会のカテキズム』発布の日からちょうど20年にあたる、ということで、その10月11日から来年11月24日（王であるキリストの祭日）までの期間を「信仰年」と定めます、とベネディクト16世教皇様は『信仰の門』という教令で発表されました（２０１１年10月11日）。その文書の９番にこうあります。

「わたしたちは、信者の生活の『あかし』がますます信頼の置けるものとなることを祈ります。わたしたちが告白し、記念し、生き、祈る信仰の内容を再発見し、信じることについて考察することは、とくに『信仰年』の間、すべての信者が自分のものとしなければならない務めです。」

これは、わたしたちの教区大会のテーマである「常に新しい創造へ」と、ぴったりつながることではないか、と言っても良いように思います。

聖パウロが「テサロニケの教会への手紙Ⅱ」に書いている言葉、「どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。…あなた方をお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてくださいます（5・23ａ，24）」に力づけられ、私たちは父である神の恵みに信頼して、共に、明るく元気に信仰の道を歩みたいと思います。

私たちに仙台教区大会の日々を与えてくださり、そして特に今日は、この青森県の集いに私たちを呼び集めてくださった父である神を、深い感謝をもってほめたたえましょう。

司教日程　7月・8月

7・1㊐ 元寺小路教会
3㊋ 司祭評・役、司祭団・役
5㊍ 社会司教委員会
7～8 部落差別人権委・合宿
10～11 東京教会管区会議
16㊊ 仙台教区・岩手県大会
21㊏ 教区大会実行委員会
25㊌ 岩手カト幼連研修会
27㊎ 仙台教区サポート会議
8・14㊋ 司祭評・役・司祭団役員会
15㊌ 北仙台教会
17㊎ 宮城県カト幼連研修会
19㊐ 北仙台教会
27～28 仙台教区司祭の集い

これからの仙台教区を考える・(前号の)続き

司教　平賀徹夫

これからの仙台教区を考えるにあたり、教区を12の地区に分ける地区制という形をとりたいと提案しました。前号に書きましたがその第一のねらいは、「司祭の派遣は小教区への派遣ではなくその地区への派遣となる」ということです。

第二は、第一と深く関連することですが、信徒の皆様の交わりの範囲も今までの小教区から地区という広い範囲に広げていただく、という考えです。小教区が今までのような小教区内“自己完結”型ではなく、「主においてわたしたちは一つ」の“わたしたち意識”を、普段から、少なくとも“地区のわたしたち”へと広げていきたいのです。例えばある主日に、司祭がミサのためにそこに回りきれないので集会祭儀でもって主日の礼拝が行われる教会があるという場合、ミサが献げられている教会ではミサ中に、ミサのない教会での集会を思いながら主において一つという連帯の精神を表す祈りを忘れないこと。“逆も真なり”で、集会祭儀においてもミサが行われている教会とつながっていることをいつも意識すること。また、東日本大震災のときから特に気づかされたことですが、カトリック教会のメンバーとして教区内に広くそしてすでに長年、居住しておられる外国（特にフィリピンなど東南アジア）からの方たちとの交わりをもっと活かしながら成長していく教会となっていくためにも、地区という広い範囲で考えるのがより有効であると思われます。あるいは、地区内の各教会での出来事や行事・ニュースなどをより頻繁に交わし合うこと。各教会で取りざたされている問題や心配事（営繕や、必要とされるまたは提供できる支援など）や、教会内のことにとどまらず地域や社会の問題なども取り上げて語り合う等々をもって“わたしたち”を広げられないでしょうか。そして、仙台教区というわたしたち教会がここにあるということの意味を一緒に考え、自由に語り合い、一緒に祈りながら、父である神様の望まれることを求め続けていく“地区レベルでの教会”となっていけたら良いと思います。

津波を超えて・闇から光へ　講師：山浦玄嗣

講演要旨

気仙の山浦でがす。この前、津波が来て、まさか海岸から10キロばかり離れていだ山浦医院までくるどは思わねがったけれども、床上浸水で半壊、それでも何とか泥水かき出して、三日目から診療を始めた。大船渡教会は、山の上にあったから何ともなかったが、南側の崖ががばーっと削られてしまってそこにあった納骨堂は皆流されて、我らの先輩たちの骨は皆散骨されてしまった。「納骨堂が出来るまで死なれねど」って言って年寄どもば励ましている(笑)。気仙のあたりは、まるで原子爆弾が落ちたみたいに何もなくなって、それからは、魚の腐ったような何とも言えない臭いで、惨憺たる有様でした。それでも最近は、あちこちに仮設の店舗もでき、少しずつ復興の槌音が聞こえるようになってきました。

悪いことばかりでなぐ、いいこともあった。それは、フィリピンから嫁ごさ来た人たちで、カトリックだったけど、姑さんに気を使って教会に来れなかった人たちがいっぱいいた。そういう人たちを探し出して、支援物資を差し上げたら、喜んで教会さ来るようになった。子どもたちも連れてくるから、百人近く信者が増えた。

最近教会も景気の悪い話ばっかりで、やれ信者の高齢化だの、神父さんもよぼよぼになって引退して、教会閉鎖だの、共同司牧だのって言ってる時に、一番被害の大きかった大船渡教会が、聖堂を拡張しなければならないほど信者が増えたという景気のいい話で、司教様も喜んでくれた。

気仙の人間はもともと陽気なものですから、元気を出して頑張ってるところです。

さて、私が生まれたころは、気仙郡で、カトリックは、おらいの家一軒だけで、キリスト教なんて誰もわかんなかった。もともとキリスト教は邪宗門で、大日本帝国にとっては、国賊であった。「日本が戦に負けたのは、おめだぢ耶蘇(やそ＝キリスト教)のせいだ」と言って、道を歩いていると、馬の糞だのべごの糞ば投げつけられたものだ。そうゆう少年時代を過ごした。

そのうちベトレヘム会の神父さんがいらして教会を建てた。私は嬉しくて嬉しくて、一生懸命布教した。だんだん信者も増えて100人位になった。ところが、それからピタッと止まってしまった。別にサボっていたわけではない。

不思議に思っていたら、あるときはっと気が付いた。

日本の人口に対して、キリスト教は1％に満たない。百人に一人ぐらいの変わった人しか耶蘇にならない(笑)。悔しいですよね。何とかしてイエス様の素晴らしさを分かってもらいたいと思った。

友達を集めてイエス様の話をしても話が通じない。聖書の感動的な場面を読んで聞かせてもみんなちんぷんかんぷんで分かってもらえない。

聖書を読んでみると、確かに気仙の鼻たれ小僧に通じるわけがない(笑)。こうゆう立派な？東京弁で書いてある聖書では、気仙の人間には通じないと思った。何とかしてイエス様の素晴らしさ伝えたい。それには気仙語の聖書が必要だと思った。気仙には、「気仙大工」という大工がいっぱいいる。イエス様も気仙大工の仲間なわけです。また、気仙には浜で暮らす浜人（はまど＝漁師）もいっぱいいます。イエスの弟子にも浜人がいます。こういう人たちが、しゃれた標準語など話すわけがないんです。みんなその土地の方言でしゃべるわけですよ。

何とかして聖書を気仙の言葉にしたいと思っていました。

ところが、気仙語をきちんと表記する文字がないんです。おらだぢは、字のねえ言葉ばしゃべってることになるわけです(笑)。大きくなったら気仙語を表す文字を作って、気仙語の聖書を作ってやろうと心に誓った。

35歳の時、一念発起して気仙語の聖書に取り掛かった。文字も工夫した。「し」でもない「す」でもないその中間の発音を表すために、「す」の横棒をとっぱらった（笑）。

―この先、山浦氏は、苦労して気仙語の文字と文法をまとめ『気仙語入門』『気仙語大辞典』を出版したこと、聖書を気仙語にするために、ギリシャ語を勉強しギリシャ語から翻訳して『気仙語聖書(福音書)』を出版するまでの苦労をユーモアたっぷりに話された。その中で、日本語聖書の矛盾について次のように話された。―

マタイの福音書の最初に、「アブラハムの子、ダビドの子、イエス・キリストの系図」とある。

アブラハムの子がダビドではないしキリストはダビドの子ではない。ギリシャ語の聖書では、子孫となっている。おかしいと思って聞いてみると「我々は、これによって日本語を豊かにした。子という言葉に子孫という意味を加えて日本語を豊かにした」とのたまう。おだづなよ！(笑)

さらに、「人々はイエスにつまずいた」とある。「つまずく」は「けっつまずく」の意味だから、イエスが道端で寝ていたので、人々がけつまずくということになる。原典では、「腹を立てた」と書いてある。当時の常識にとらわれないイエスの言動に「かんかんに腹を立てた」これなら分かる。

「私はブドウの木、私に繋がっていれば豊かな実を結ぶ、私に繋がっていても実を結ばないものは、切り取って火に投げ込まれる」とある、「つながっていれば実を結ぶ」と言っているのに、「つながっていても実を結ばない」とはどういう事か。

「つながっていても、実を結ぼうとしない」ということだと意味が分かる。

このように、ギリシャ語の原典を読んでみると実に面白い。そこには生き生きとしたイエスの姿が描かれている。このイエスの姿を人々に伝えられたら、キリスト教は、百分の一の変わり者だけでなく(笑)多くの人がイエスに魅せられるはずだ。そう思って、一般の日本人にも分かる気仙語ならぬ世間語のみんなが腹かかえて笑うような聖書にしようと考え「ガリラヤのイエシュー」を出版した。

伊達に津波の洗礼を受けたわけじゃない。この国が神様の息吹で豊かに生かされるような明日を創るようみんなで力を合わせようじゃありませんか。(文責 岩井)

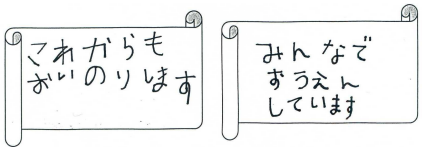
絆のローソク・リレー

米川聖マリア保育園　　12・1・12

東日本大震災で被災された方に心からお見舞い申し上げます。少しずつ、一人ひとりが前に進んで行けますように。私たち職員も、子どもたちもともにおいのりしております。

米川ベースのボランティアの皆さんや、他の方々も、健康でお仕事ができますように。

今、絆を大切に、心を一つに、被災された方々のために、これからも皆で祈り続けます。



特別養護老人ホーム「パルシア」

12・1・6

新しい創造に招かれた
私たち一人一人　心ひとつにして
絆をさらに強めて参りましょう。
全国からの温かなご支援に感謝しつつ

石巻教会　　12・1・8

今までの支援　心より感謝!!
今後共、一緒に歩みましょう!!

軽費老人ホームあけの星荘

12・1・1

全国からいただいたあたたかなご支援、たくさんのお祈りに感謝いたします。大地震で亡くなられた多くの方々の魂が神様のみもとで安らかでありますように。

今なお大きな悲しみ、苦しみの中にいる方々に、試練を乗り越える力と希望をお与えください。

人と人とのつながりに感謝/自然に対し謙虚になれたことに感謝/今ある命に感謝/いつも神様から守られていることに感謝/一人ひとりの小さな感謝が大きな愛のエネルギーになりますように！

聖母訪問会米川共同体
カリタス・ジャパン米川ベース

12・1・13

被災者の方々との出会いを大切に！ 愛といつくしみをもって小さな奉仕ができますように！

石巻カトリック幼稚園　　12・1・11

今日、絆のローソクに灯を灯し、お祈りをお捧げしました。東日本大震災で被災したすべての人たちのために、そして全国、全世界から寄せられるあたたかい気持ちに感謝して…

今なお小さな揺れにおびえる子がいます。雨が降ると不安な子もいます。仮設から通っている子もおります。この子どもたちの思いを、そして今も苦しんでいる多くの方々の思いを受け止め、共に復興していけますように…

全ての人々が、神様の愛に見守られ、生かされている幸せを感じとることができますように…

特別養護老人ホーム「暁星園」

12・1・4

当園の集会所に入所者、職員が集まり「絆のローソク」を灯し東日本大震災で犠牲になられた方々のご冥福と、大切な方々を亡くされ、住まいを流され、仕事もなく、多くの悩み苦しみのうちにある方々が一日も早く希望の光を見出し、前に進むことが出来ますように祈りました。

ご高齢の入所者の皆様は、被災地に行き、直接手助けをすることは出来ませんが、手を合わせて祈り、被災地の皆さんを応援してゆきます。

気仙沼教会　　12・1・15

みなひとつになろう

たくさんの「祈りの花束」
温かい「おはげまし」多大な「ご支援」に　感謝!!

愛心幼稚園　　12・1・26

2011年3月11日当園では、50名の預かり園児がお昼寝中、バス2台が運行中でした。園児が保護者のもとに帰したころには市内はもう真っ暗でした。
教師の母親が津波で亡くなり、実家が流された教師もいます。園児の中にもお父さんのお店が流されたり、病院が壊れてしまった子もいます。気仙沼から、大船渡から、郡山から避難してきた子もいます。
震災で亡くなられた方、放射能で苦しんでいる方を思い、復興と、避難してきた方がもどれるように願い、日本中、世界中の支援をして下さった方に感謝し、ローソク・リレーのお祈りをいたしました。「かみさまわたしたちのねがいを　きいてください」

児童養護施設　一関藤の園
12・1・28

人的な被害はなかったものの、築32年の園舎に多数の亀裂が入るなど大きな被害がありました。ライフラインや余震が続いたことから子どもたちは1週間、体育館での避難生活を余儀なくされました。
その後園舎の改築が決まり、昨年12月に仮設棟に移り生活を始めました。仮設棟はとても寒く、狭いこともあり不自由なことも多々ありますが、みんな助け合い、希望を持って前を向いて歩んで行きたいと思います。
震災以降、日本国内、世界中のたくさんの方々から心温まる励ましやご支援をいただいております。「人と人との絆」や「人間の素晴らしさ」を実感し、助け合うことの大切さや思いやりの心を学ぶ機会となりました。
これからも、多くの方々の善意に支えられていることを忘れることなく、子どもたちと歩んでまいります。
今なお、苦しみの中におられる多くの方々に主の平安が一日も早く訪れることをお祈りいたします。

大船渡教会　　12・1・22

まだまだがんばんなぃば
ないけんと
神さま たよりにしてれば
やんびゃぁになるべがら。
ろうそくさ つながって
神さまに守られた
みんなの顔が集まって
いがったなぁ。

海の星幼稚園　　12・1・23

大震災で車庫と園舎に上る坂道を流され、大変な苦労をしましたが、子どもたちの明るい笑顔と元気な姿に励まされ、例年通りの行事を行い、普通の生活を送られることに幸せを感じることが出来ました。全国各地から温かいご支援をたくさんいただき、人の持つやさしさ、思いやりの心に深く触れ感謝でいっぱいです!!
子どもたちの健やかな成長と人々の平安を心より祈ります。

千厩教会　　12・1・25
カトリック清心幼稚園

東日本大震災で亡くなられた清心幼稚園の舞ちゃんと、そのお父さんのために祈り、被災された皆様のためにも信徒と園児が心を一つにして歌とお祈りをささげることが出来ました。千厩(フィリピンから来た若い母親)や藤沢に避難している信徒さんも出席し、悲しみを皆で分かち合い、少しずつでも希望に向かって歩めるように思いました。
ローソクの光がますます輝くように、カトリックの精神が私たちを強めてくださるよう祈り続けます。

米川教会　　12・1・15

宮城県の一番端っこの小さな教会です。信者も老齢化して主日のミサも少人数ですが、殉教地ということで、先人のその灯を消さないように、ささやかながら守っていきたいと思っています。

気仙沼カトリック幼稚園　12・1・16

＜震災とその歩み＞
いつもそばに子どもたちがいました。
子どもたちの笑顔に励まされ
共に生きる喜びを子どもたちに伝える
教区内をめぐる絆のローソクの光。
世代を超えてゆだねる希望の光
多くの皆様に感謝。

聖心侍女修道会大船渡拠点 12・1・18
カリタスジャパン滞日外国人センター

大震災後、仙台教区の皆様と心を一つにして地域の人々の「いこいの家」で復興のために日々祈りのうちに活動しながら東北の方々と生活を共にしています。神様の恵みのうちに一歩一歩進んでいきたいです。
仙台教区の75周年、神様のさらなる祝福を祈りつつ。
＊大船渡･陸前高田におられる外国の方々と「ともに歩む･共に生きる」ことによって「絆の光」が輝くようになり、苦しみの中にも笑顔のあるFAMILYを目指します。

仙台教区義援金収支報告

仙台教区を義援金の形で助けて下さった皆さまへ

仙台教区　司教　平賀　徹夫

昨年の3月11日から1年が過ぎました。仙台教区ではこの1年間、有形無形の支援、救援、応援を各方面から多大に戴きまして、本当に感謝に堪えません。衷心よりお礼申し上げます。

皆さまから預からせて頂きました義援金は、私どもなりに使い方を精査し、仙台教区内の被災した小教区の建物、諸事業体の建物の復旧、および被災した教会関係者にお渡しして参りました。渡された方々は皆さん本当に喜んで下さり、義援金をお寄せ下さった皆さま方の篤い思いが、その方々には大きな慰めになったことと存じます。本当に有難うございました。

これまでに仙台教区に寄せられた義援金の報告が整いましたので、ご報告申し上げます。本来ならば、もう少し早い時期に報告出来ればと考えて参りましたが、1年が過ぎたこの時期になってしまいました。遅くなりましたこと、たいへん心苦しく存じますが、どうぞ御容赦願います。

祈りのうちに

2012年5月1日

東日本大震災「仙台教区義援金」収支報告
－2012年3月31日現在－

❶仙台教区に寄せられた義援金について

①仙台教区外から　※括弧内の件数は延べ数・単位円

1）教区から（20件）	21,878,137
2）宣教会・修道会から(327件)	170,111,933
3）小教区から（1016件）	172,014,828
4）諸施設から（102件）	19,700,453
5）その他の団体から（131件）	37,230,852
6）個人から（1225件）	89,119,728
7）外国から（93件）	216,986,075

②仙台教区内から

1）宣教会・修道会から（21件）	6,564,616
2）小教区から（61件）	9,755,603
3）諸施設から（12件）	1,179,982
4）その他の団体から（9件）	935,175
5）個人から（55件）	4,762,492
総計(3072件)	**750,239,874**

❷義援金の使われ方について

支援内容は次のように定めました。

①建物・設備・横築物・備品等復旧支援

教区内の小教区聖堂、修道院、幼稚園等学校教育施設、保育園等社会福祉施設、医療等その他の施設の原形復旧に要する費用の支援（教区で定めた基準に則った額）

②弔慰金(信徒が対象)見舞金(信徒及び事業体職員)

弔慰金は死亡者、一人につき10万円。見舞金は住宅の全壊・半壊、一世帯につき10万円。

③生活支援金（信徒の生計維持者対象）

住居損壊による転居、被災による失業、及び福島第一原発事故避難地域からの避難などによる生活困難者、一人につき毎月2万円。（年額24万円）必要に応じて2年乃至3年間継続する。

④自家用車損壊支援金

（信徒及び各事業体職員が対象）

被災により損壊した自家用車等を買い換えるための支援。一台につき20万円。

⑤経営支援金

（教区内の教育事業体が対象）

被災理由の退学等学生生徒の減少による経営的損失補填のための支援。

幼稚園　2011年7月1日現在(以下同じ)の退園、転園、休園者一人5万円。

小・中・高　退学、転校、休学者一人10万円。

短大・大学　退学、転校、休学者一人15万円。

❸2012年3月31日までの給付報告

①建物・設備・横築物・備品等復旧支援

小教区聖堂26件（青森1、岩手6、宮城10、福島9）

修道院　9件（岩手3、宮城5、福島1）

幼稚園　14件（岩手3、宮城5、福島6）

小中高大　12件（宮城7、福島5）

福祉施設　9件（うち2件は予定）

医療他　4件

②弔慰金17名（岩手6名、宮城11）

見舞金381件（信徒303名、事業体職員78名）

③生活支援金158名（岩手52、宮城103、福島3）

④自家用車損壊支援金信徒98名（岩手32、宮城65、福島1）各事業体職員7名

⑤経営支援金

幼稚園数　23園（岩手5、宮城9、福島9）

支援総数288人分

小・中・高・大　9校（宮城4、福島5）

支援総数118人分

❹給付額一覧表

給付済(給付予定)支援金内訳　（単位:千円）

区　分	建物等復旧	弔意見舞金	経営支援	生活支援	自家用車	計
①小教区	174,505	30,300		33,680	19,400	257,885
②修道院	16,173					16,173
③幼稚園	25,473	3,500	14,400		400	43,773
④小中高大	105,136	3,700	11,850		800	121,486
⑤福祉施設	6,027	2,100				8,127
⑥医療他	76,541	200			200	76,941
給付済計	403,855	39,800	26,250	33,680	20,800	524,385
給付予定	165,000			50,000		215,000
事務経費	7,500					7,500
合　計	576,355	39,800	26,250	83,680	20,800	746,885

❺まとめ

義援金総額　750,239,874円

支援金総額　746,885,000円

(給付予定額、事務経費を含む)

収支差額　3,354,874円

(2012年3月31日現在)

現在も義援金は寄せられ続けています。新たな義援金の使われ方を現在模索しております。ご支援誠に有難うございました。

八木山オリーブの会・亘理仮設訪問

仙台教区「新しい創造」への取り組み

「八木山さん！」私たちは亘理の仮設旧館でこう呼ばれています。

毎月2回八木山教会と亘理教会など12名程度で訪問しています。

仮設訪問は6月で8回目となり信頼関係の段階から独立支援の段階に移行しつつあります。

具体的には着物を加工して自分の洋服を作る段階から、和風の小物を作成して生活費を稼ぐ自立の支援に導くことを目標に転換してゆきます。

男性の参加も考慮して季節のイベントを盛り込みながら少しずつ参加拡大を模索しています。4月は花見に51名が参加して楽しい時をすごしました=写真=。他団体が訪問活動をあいついで中止する中、長期展望を持ち継続して活動することが必要になっています。

支援の着物は傾聴活動だけでなく仮設住宅の普段着作成の材料になっています。

着物の中には解くのが勿体ないような上等な品もあり被災者の希望者にくじで配布する事もあります。葬儀の必須アイテムの礼服は希望者が殺到しています。

今後は着物の生地を活用した和風小物の商品を作成して付加価値の高い販売を目指します。日本とスイスの国交150周年を2年後に控えヨーロッパで販売する提案があります。

バックやアクセサリー作成の勉強会をしながら夢はスイスで売れる商品の作成を目指しています。

仮設の方々の作業を無駄にしない「商品の企画と提案」を行いながら自立への段階を被災者と共に歩んでゆきたいと考えています。

私たちは活動を通して多くの小さな奇跡や感動を体験させていただいています。

活動直後に行っている分かちあいの一部を紹介します。

［花見1］今日は去年出来なかった花見を2年分やるんだもの「バスはまだか？」予定時刻の30分前には全員が集合して待っていました。「観光バスなんて1年半ぶりに乗ったし、小学校の遠足みたいで楽しい」

［花見2］お母さんと花見に参加するため仙台から駆けつけた娘さんがいました。

仮設に住む被災者で亘理町の臨時職員も休暇を取って参加してくれました。

職員いわく「今日の仮設はほとんどからっぽです」

［着物1］私も娘に七五三の着物を買ってやったけど、全部流された。もう買ってやれないと思ったけどまた手に入って嬉しい」

［着物2］「踊りのきものはクジでなく私にくれませんか？」踊りの先生をしていた被災者が言いました。

「諦めていた踊りをまた教えることができる。とっても嬉しい」

（八木山教会 野田和雄）

【お願い】タンスに眠っている**きもの**や**帯**はありませんか？八木山教会は着物が必要です。商品作成数量の増加に伴う材料の不足が予想されます。

送付先　仙台市太白区三神峯2-6-35　竹内 哲子

022-245-7609

赴任司祭の自己紹介

淳心会司祭のギャリー・ゲストヴェオです、「ギャリー」と呼んでください。

淳心会って何の会か知らない方、特に仙台教区の皆さん多いと思います。この機会で淳心会をご紹介と思います。

淳心会は、1862年に、ベルギーのマリン大司教区の教区司祭であったテオフィロ・ベルビストによって創設された修道会。淳心修道会。淳心会はラテン語を直訳すると、「マリアの汚れなき御心」という意味です。

現在、ベルギー、オランダ、コンゴ民主共和国、フィリピン、インドネシアからの宣教師が大阪、広島、東京などのさまざまな教区で活動しています。

わたしは、昨年の10月から大船渡に派遣され、仙台教区外国人の司牧をしています。今現在大船渡のカリタス・ジャパン外国人サポートセンターに住んで、ハルノコー神父さん（淳心会）と一緒に活動しています。どうぞよろしくお願いします。

「絶えず喜びなさい…」

仙台教区の皆さま、はじめまして。アントニウス・ハルノコーと申します。1970年にインドネシアで生まれ、1990年に淳心会に入会して、1998年に来日しました。その3年後、司祭叙階の恵みを受けてから5年間大阪大司教の共同宣教司牧（堺ブロック）で働いて、南山大学院に3年間行かされてから東京大司教区松原教会の主任司祭として務めました。3・11大震災の後、姫路中ブロックに移動して、まもなく2011年11月に仙台教区カリタス・ジャパン滞日外国人支援センターに派遣されました。

大震災を体験された外国の方々のために、持ってきたのはただ一つです。それは「笑顔・SMILE」となります。どんなときでも、笑顔でともに歩んでいけたら、復活されたイエスの喜びを活かすと信じます。これからの道はまだまだ長いと思いますが、手を携えて一緒に行きましょう！どうぞよろしくお願いします。

【お詫びと訂正】205号3頁「赴任司祭の自己紹介」藤井泰定神父様の記事で、「1988年7月から1年間ケルン教区外国人司牧局」の記載がありましたが、1988年7月から1997年6月末までの9年間ケルン教区で司牧されたとのことでした。お詫び申し上げます。

東日本大震災 仙台教区復興支援　第２回全国担当者会議
主催：カトリック司教協議会

復興支援の課題と方向性をさぐる
元寺小路教会でシンポジウム

大震災からの復興と被災者の支援を日本のカトリック教会が一丸となって取り組もうとカトリック司教協議会が主催する第2回全国担当者会議が、6月11日から13日まで開催され60余名が参加した。

初日と2日目は、5つのコースに分かれて、被災地のベースを拠点に視察や研修、支援活動を行い、最終日に元寺小路教会大聖堂に集まりシンポジウムと「犠牲者を追悼し、復興被災者への癒しを求め、復興支援活動に祝福を求めるミサ」がささげられた。

シンポジウムは、13日(水)9時から正午まで、一般信徒やボランティア活動に参加している人など50名ほどが聴衆として参加した。

第1部は「津波被災地での復興支援を考える」と題して支援活動における様々な課題を共有しようと、パネリストの報告に耳を傾けた。

高齢者が孤独から認知症になる。生活の見通しがたたず、生きる力が薄れていく。子どもの心の傷と、子どもを育てている母親も心の深いところで傷ついている。外国人へのサポート。障害を持った人の支援。ボランティアや支援者にも癒しの場が必要等々課題はつきない。

教会が「最も谷間に置かれた人」に寄り添うのなら、そうした人を見いだす努力が必要である。支援には、顔と顔をつなぎ、被災者のコミュニティを成長させていく必要がある等、被災地での活動体験からくる具体的な課題が話された。

第2部では、「フクシマをめぐる復興支援活動を考える」と題し、放射能被害に加えて風評被害、また根拠のない差別に苦しむ人々の様子と支援活動の在り方についてパネリストの発表があった。

中でも、二本松教会の柳沼千賀子さん＝写真右から3人目＝は、放射能汚染と風評被害に悩む農家の人が、作物にカリュウム肥料を与えることで放射線を含むセシュウムを取り込まなくなることから、安全な作物の栽培に取り組んでいるが、福島産というだけで買ってもらえない。そこで自ら農産物をトラックに積んで、東京まで行き、協力してくれる教会で販売しているという。ぜひ、福島の作物を各教会、信徒の協力で買って欲しいと訴えた。

被災者と一言でかたづけられない一人ひとりの事情があり、自立を目指して立ち上がろうと頑張る人や、どうにもならない状況に気力の弱まる人、高齢のため先が読めない不安を持つ人等々課題も多く、それを支えるための知恵や手法の開拓などが求められる。

「独り子を与えられたほど世を愛された」神の愛を見える形で被災地に届ける教会の使命が確認された。

午後のミサ（平賀司教主司式）で、菊地功司教は、説教で「3・11以降、日本の教会は新しい福音宣教が始まっている。人との出会い、ことば、行いを持って取り組もう」と励ました。

「青森県の集い」と教会巡りの旅に参加して
元寺小路教会　松永 利昭

仙塩地区7教会の信者60名余りが2台のバスに分乗しての今回の旅は、途中満開のアカシヤの中、藤の花や谷うつぎが美しく混じる二日間のバスの旅でした。

今回訪問した弘前教会をはじめ、本町教会、浪打教会、十和田教会、八戸塩町教会の多くが、19世紀から20世紀初頭に宣教会、修道会の神父様方の大変なご尽力の下に献堂、維持され、100年余りを経た今、教区の教会として根付いてる。弘前教会では、オランダより譲り受けた祭壇＝写真＝に目を見張り、正面最上段には聖トマス・アクィナスが「神学大全」を持って見下ろしている。八戸塩町教会では、新進の彫刻家による御像と道行きの彫刻の数々など、それぞれの教会が大切に守ってきたものについて、それぞれ思いをこめた解説を聞かせて頂いた。

一方、30年ほど前に結婚式を挙げた教会を久し振りに訪れ、昔の感激に浸る方、懐かしい神父様方にお会いしたり、故人となられた神父様のお名前に昔を思い出す方、などなど…。

青森県大会も大変よく準備されており、大会冒頭の映像も八戸の現状をありのままに映し出して被災状態がよく分かるものでした。今回の震災の被害を最も受けたはずの「気仙」の山浦先生が最も陽気で元気なお話をされ、それを受けて司教様も、山浦先生の話で教えられたことがあったよ、と言われる。それも、教区誕生75周年記念のTシャツを着込んだ姿で、という具合。教区事務局長の小松神父様からも、この一年余りの被災者支援、ボランティア活動の様子が丁寧に報告された。

帰路のバス内は特に打ち解けた雰囲気となり、案内役の軽妙な語り口に和気あいあいの中、スタンプ帳を大切に持って、定刻の夜7時半に無事元寺小路教会に到着。今回の旅では、誰もが本音で語り、正直に真心を出し合っていたのが印象深く心に残ります。

50年前に開かれた第2バチカン公会議。それが私たちの教会のこれからに定着していくのに大きな意味をもつ今回の大会、巡礼であったなとしみじみ感じた旅でもありました。

関係者各位のご努力に感謝!!

大震災後の取り組みを検証

仙台教区修道女連盟総会

仙台教区内にある27の修道院から院長たちが集まり年1回の総会が6月2日(土)元寺小路教会の会議室で開催された。

年度総会の後、平賀司教より仙台教区の現状についてお話をいただいた。

「少なくとも行いによってキリストを述べ伝えることが大事な務めです。

大震災後、日本中の各教区からの応援で、多くの司祭方の派遣があり、各ベースを立ち上げることが出来たこと、また仙台教区外からシスターズリレーをとおして多くのシスターたちが被災地支援に尽力したこと、またリレーが終わった現在も6つの修道会からシスターたちが派遣され釜石、米川、石巻、塩釜、福島県の原町の各ベースで、被災地の人々とボランティアたちの心の支えとなっている。

このようなことは日本のカトリック教会始まって以来の出来事で、150年前横浜に黒船が入り日本が開港したのと同じぐらいの大事であり、今こそ日本の教会の転換期ではないか」と結ばれた。

午後は、2人のシスターによる大震災での体験の分かち合いとそれぞれの体験、感想などが話し合われた。

始めに地震、津波とともに原発の被害も合わせ持つ福島県の人々に寄り添い祈り、活動したコングレガシオン・ド・ノートルダムのシスターたちの働きの報告、次に大震災の1週間後、いち早くサポートセンターに修道院を全面的に開放して協力するとの登録をし、各地から送られる支援物資はこの修道院に集められそこから被災地に運んだこと、避難する人々への場所の提供、ボランティアの宿泊所としての提供など仙台のオタワ愛徳修道女会の勇気ある行動の報告があった。この分かち合いをとおして、司教様が始めに言われた、「教会は信徒や修道会のためだけにあるのではなくその地域全体のしあわせのためにあるのだ、教会の存在意義を再確認したい。」との言葉を改めて考えさせられた。

最後に今後の仙台教区の新たな創造を願い「希望の灯」を歌い会を終了した。(聖ヲルスラ会小川敦子)

赴任司祭の自己紹介

ホセ・モンロイ 神父
(グアダルペ宣教会)
仙台教区の皆さん、

私の名前はホセ モンロイ ペレイラです。4月17日より、盛岡ブロックの司祭たち、信徒の皆様と一緒に神様の道を歩み続けるように派遣されました。

私たち司祭は、宣教師として来ましたので、その仕事を一生懸命やりたいという気持ちがあります。しかし自分の力だけでは出来ないことも、信徒の皆さんと一緒にすることで、間違いなく果たすことができると思います。

皆様は、洗礼を受けた時、神様の子どもとなり、大きな贈り物を受けました。信仰という贈り物です。その贈り物は、隣人と分かち合うためのものです。宣教師と呼ばれるのは、司祭やブラザー、シスターたちだけでなく、信徒一人ひとりも宣教師といっても間違いではないでしょう。

隣人とは、信徒だけではありません。信者でない人も私たちの隣人です。この隣人に、少なくとも行いによってキリストを述べ伝えることが大事な務めです。

どうぞ皆さん、これからキリストのように行い、隣人のために働きましょう。

1938年3月21日、メキシコ・グアダラハラ市生れ。1964年8月15日叙階（グアダラハラ市）。1年間グアダラハラ市で働き、1965年日本派遣。喜多方、京都、東京で司牧。ドミニコ 狩浦 正義 神父
(原町教会)

仙台教区の皆さん、
こんにちは！

名古屋教区の司祭、狩浦（かりうら）です。5月3日原町教会の方々が温かく迎えてくださり、主の道を共にできることを心から喜んでいます。とは言っても、まったく初めての地で、知らないことばかりです。すべてゼロからの旅立ちです。ちょっと格好いい表現ですが〈挑戦は恵みです〉。年金暮らしの年だからこそ、単純さや遠くのものに思いをはせる歩みを共にしたいと思います。南相馬市の原町区での教会生活は、早朝散歩で始まる。散歩中、胸に飛び込んでくる言葉がある。それは、アダムとエワが主の掟を破り、エデンの園から逃げ、隠れていた時の主の問いかけである。「あなたは何処にいるのか」〈何処〉は場所の意味でしょうか、おそらく〈誰かと共にいる場所〉即ち〈隣人がいる場所〉ではないでしょうか。いつ終りが来るか確かでないけれど、寄り添い続ける関わりは、主が私たちの間に幕屋を張り〈絶望を希望へ〉と変えてくださる。愛といのちこそキリスト者のメディアであることを信じて。

1946年12月13日長崎県五島市生まれ(65歳)。1974年3月17日布池教会(名古屋教区司教座聖堂)にて叙階。平山教会・布池教会・豊橋教会・膳棚教会で司牧。

いのちの約束

南三陸の二人の青年は、津波という大災害で、漁場という生活の場と風光明媚なふるさとの瓦礫化になす術を失いました。一年後、二人はこの地で「生きる意味」を見出しました。

先祖たちもこの“津波”という“自然”の現実を受け止め、災害をもたらす自然の脅威と闘いながら予防する術を学び、自然の恩恵に浴し感謝して共に生きてきたという誇りある生き方を思い起こしたのです。そして、未来に生きる自分たちの子どもたちのために、自分たちもまた先祖が残してくれたように、美しいふるさとの海と生活の場を取り戻そうという「生きる意味」を見出したのです。未曾有と想定外という呪文から抜け出して。

人間と自然、今と未来の世代の関係を、大災害で打ちのめされた現実の中で、人間の発想の領域を超えた自然という生きた存在と向き合ったいのちの約束が聞こえたように思われたのです。　地球を大事にする会　佐藤　廣子

【お詫びと訂正】２０５号３頁
村上ステファノ→村首
板垣 勉→板垣 勤

村首ステファノ神父帰天

村首ステファノ神父は、6月15日、午前3時33分、光ヶ丘スペルマン病院ホスピス棟で帰天された（83歳）。

17日(日)17時から通夜、18日(月)葬儀ミサ・告別式が元寺小路教会にて行われた＝写真＝。

村首師は、1929年ベルギーのブリュッセルに生まれ、27歳の時、ベルギーの宣教会SAMの司祭として来日し、仙台教区に赴任した。6年間労働司祭として、高円寺教会の助任をしながら、ベルギーのサベナ航空に勤務した。

また、外国人登録の指紋押捺制度に反対し、指紋押捺を拒否し続けた。

葬儀で、SAMのアンドレ・カンペンハウド師は、葬儀ミサの説教で「彼の行いや考えは、なかなか理解できないかもしれないが、私たちに考えることを教えてくれた。短大で教えていた時も、学生たちに自分で考えることの大切さを強調していた。『キリスト教は、人を自由にし、成長させる宗教だ。日本の社会と教会の間にある壁を乗り越えなければならない』といつも言っていた。

イエスに対する完全な信頼をおいて司祭職を全うした」と話された。

【略　歴】

1929年2月25日生まれ
1954年7月11日　司祭叙階
1954年ロンドン、ハムステッド教会助任
1956年　仙台教区事務所
1962年　米川教会主任
1967年　築館教会主任
1970年　高円寺教会助任・サベナ航空
1977年　仙台北部地区福音宣伝道開拓
1989年　司教館付　司教外国語秘書・県南地区協力
2004年　引退　司祭の家
2012年6月15日　帰天
米川聖マリア保育園園長
築館聖マリア幼稚園園長
桜の聖母短期大学講師
仙台白百合短期大学講師
宮城教育大学講師
大河原カトリック幼稚園園長

訃報

スール
マリア・モニカ
万年　勝子
（聖ウルスラ修道会・一本杉修道院）

1922年9月6日　誕生
1946年12月24日　受洗
1949年4月9日　入会
1952年8月30日　終生誓願
2002年9月16日誓願50周年
2012年5月5日帰天（90歳）

聖ウルスラ学院家庭学校の教頭・校長として優しさと厳しさをもって子女の教育に情熱を傾けた。

このままでいがす！
仙台教区報」アンケート結果

編集委員会では、教区報のリニューアルを検討するにあたって、読者の皆さんに「アンケート」を実施し173通の回答を得た。

結果は、全ての設問について、現状のままでよいという意見が多かった。

紙面のカラー化については、予算の絡みも考慮し、モノクロでよいという意見が多かったが、一部、または年に1～2回程度カラーにしてはという意見もあった。

用紙サイズは、ファイルすることや、手に取った時の持ちやすさなどを考えるとA4のほうが良いとの意見があった。

文字サイズは、大きいに越したことはないが、記事の量から考えると今のままでも良い（眼鏡をかければ十分読める）。

レイアウト、記事内容については、肯定的な意見が多かった。

【寄せられたご意見から】

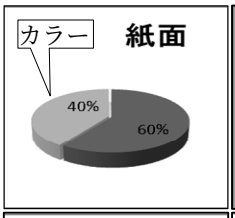
「教区のこと、小教区のことが良くわかり、楽しみにしている」という意見が多かった。一方、「情報が仙台や宮城県のことに偏っている」「堅苦しく、面白みがない」「文字間や行間が狭く読みにくい」など、反省させられる意見もあった。

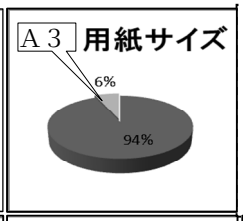
「信仰の糧となる内容がほしい」「司祭の一言や、活動の様子を紹介してほしい」「青少年のこと、子どものための記事がほしい」「カトリック系の施設・学校、ホームレス支援、外国人支援などの紹介記事がほしい」など具体的な提案もたくさんいただいた。

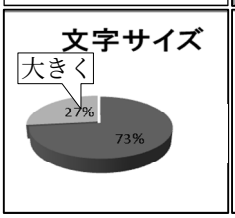
編集委員会としては、皆様から寄せられたご意見を精査し、たくさんの感謝や励ましの言葉に支えられながら、教区の皆様に喜んでいただける「教区報」を目指して、さらなる努力を重ねていきたいと思う。

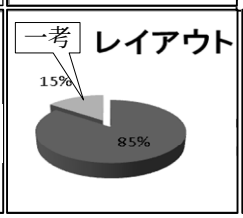
アンケートへのご協力ありがとうございました。（編集委員会）

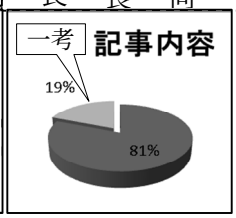
アンケート設問
◇紙面①モノクロ②カラー
◇用紙サイズ①これまでと同じ②大きく
◇活字の大きさ①これまでと同じ②大きく
◇レイアウト①良い②一考を要す
◇記事内容①良い②一考を要す











新刊案内

教皇ベネディクト16世
使徒的勧告「主のことば」

著者　教皇ベネディクト16世
発行　カトリック中央協議会
定価　本体1200円＋税

2008年10月5日から26日までバチカンで開催された、「世界代表司教会議（シノドス）」は、「教会生活と宣教における神のことば」というテーマで話し合われました。このシノドスは、教皇ベネディクト16世が開催した最初のシノドスで、「聖書」がテーマとして取り上げられました。

このシノドスに出席した司教たちは、エマオの弟子たちが体験したように、「その心は燃えていたではないか」というような体験、また聖霊降臨のような恵みに満ちた日々を送られたそうです。

全体は3部に分かれており、第1部は「神のことば」。

語られる神、その神に応答する人間、そして、聖書解釈の第1の場である教会がどのように聖書を解釈してきたかが述べられています。

第2部は「教会におけるみことば」。

特に典礼における神のことばと、教会生活における神のことばが取り扱われています。

第3部は「世のためのみことば」。

宣教の使命を持つ教会、神のことばと世とのかかわり、神のことばと文化、諸宗教との対話における神のことばなどが説かれています。

キリスト者として聖書を読むために、また、神のみことばを生きるために、多くのことを教えてくれるものです。